

岡山の博物館

岡山県博物館協議会会報 No.45 平成26年1月

CONTENTS

- P1 備前市歴史民俗資料館「展示紹介」
- P2 館長随想「『展示叙述』のすすめ」(岡山県立記録資料館 館長 定兼 学)
- P3-P9 平成24年度 第2回研修会「異種館の交流事業の可能性をさぐる」
- P10-P11 平成25年度 第1回研修会「文化財の取り扱いについて」
- P12 アートプロジェクト「廻遊—海から山から—」

わが館のイチ押し

備前市歴史民俗資料館「展示紹介」

備前市歴史民俗資料館は、「備前焼」「耐火煉瓦」などをテーマに、市内のさまざまな郷土資料を紹介し、先人の智恵や生活を現代・後世にまで伝える施設として平成3年に創立しました。建築は元簡易裁判所を改装したものであり、セラミックス室・文芸室・民芸室の三室、さらに企画展示室一室の合計四室で構成されています。

セラミックス室では、各時代の備前焼、耐火煉瓦の歴史などを展示しています。備前焼は平安時代末頃から備前市伊部周辺で作られ始め、室町時代には大窯が築かれ、共同生産が行われるようになりました。耐火レンガは三石地区、伊部・片上地区を中心に栄え、全国に流通し、日本の近代化を支えました。市内に残る資料の他、東京から里帰りしたレンガも展示しております。

文芸室では、備前市ゆかりの小説家や文学者たちの書業を紹介しています。『何処へ』『内村鑑三』などの作者である正宗白鳥(1879-1962)は自然主義作家であり、昭和25年(1950)に文化勲章を受章しています。白鳥の弟で国文学者の正宗敦夫(1881-1958)は与謝野鉄幹・晶子夫妻と交流があり、備前市穂浪にしながら多くの古書典籍を収集・研究し、正宗文庫を創立しました。さらに『眠狂四郎』で人気作家となった柴田錬三郎は直木賞を受賞、『罪な女』を執筆した藤原審爾も直木賞を受賞しています。

民俗室では、江戸時代から昭和初期頃まで使用され、現在ではほとんど使われなくなった、日常生活用具や農業・漁業の用具などを展示しています。昔の暮らしをわかりやすく紹介し、歴史や民俗にふれあうことのできる展示室になっています。

この他、年に数回のワークショップと、郷土の人物や歴史などを取り上げた企画展を行っています。夏には、閉館後の資料館でクイズラリーをする「ナゾ解かナイト☆ミュージアム」を企画し、楽しみながら歴史に触れるきっかけづくりとしました。また、地元の画家・正宗得三郎の魅力を紹介する、企画展「色を奏でるポアンチスト(点彩画)正宗得三郎」を12月15日まで開催。今後、平成26年1月10日(金)から2月23日(日)まで企画展「備前の戦国」を開催する予定です。



WSナゾ解かナイト☆ミュージアム



セラミックス室の様子



資料館外観

開館時間 9:00-16:30
入場 無料
休館日 月曜、祝日の翌日、年末年始
駐車場 あり
備前市東片上385 0869-64-4428
備前片上駅 西へ徒歩5分

「展示叙述」のすすめ

岡山県立記録資料館 館長
定兼学



「展示叙述」とは、1993年にオープンした東京都江戸東京博物館の展示をめぐる有識者の議論のなかで、当時東京大学教授吉田伸之氏(日本史)が提唱した造語である(*)。氏は歴史博物館における展示とは、歴史研究者による広義の歴史叙述の一形態であるという。そもそも展示は、館の方針とか展示スペースの条件など、いろいろな拘束や制約があるにしても、担当者(達)が調査研究した成果を具現する場であり、「叙述」という知的創作活動である、との考えである。

吉田氏は展示行為自体を「展示叙述」としているが、氏の思いには図録作成や展示説明会などの活動も含めた行為も想定していよう。わたくしも同感であるが、図録を作成していない当館では、次の要件を備えるように意識している。

まず第1に、展示を構成した意図を説明することである。テーマ選定は館の方針として決められたものかも知れない。しかし、そのテーマをどういう文脈で構成するかは、担当者(達)の知的営為に他ならない。一般に展示構築には次の2方法がある。事前に文献調査等をして、あらかじめ構成を整え、そこに展示資料を配列する方法と、様々な展示したい資料を探し出し、そこから構成を整える方法である。前者がトップダウン、後者がボトムアップの方法といえるが、それは二者択一ではなく、双方向のせめぎ合いのなかで、試行錯誤あるいは担当者が議論しながら構築しているはずである。

「展示叙述」には、そのような構成にする理由、さらには思考や議論の過程と結果がわかるようにしたい。

第2に、資料を選定した理由を明解にすることである。実際の展示解説キャプションでは、文体・形式・分量等に制約があるため、往々にして簡略な説明に終わり、禁欲的な解説文が多い。かといって説明が長すぎると、資料自体を鑑賞するエネルギーが削がれてしまう。特に当館のような公文書・古文書等のアーカイブズ(記録資料)の展示は、絵図や写真などを除いて、解説文の執筆では大変苦労している。

例えば、「これが瀬戸大橋架橋に関わって県庁で協議した公文書綴です」として公文書をガラスケース内に置いたとして、ケースに目をすり寄せて資料を観察する

ようなシロモノではない。そこで「最終的な決裁印のある資料」などと資料価値を付与するよう努めている。また、簿冊の頁を広げて、「ここに関係地域の環境影響調査が書かれています」としても、ケース内の文字は小さくて読みにくい。じっと立ち止まって全部読むには時間がかかりすぎる。そこで、見て欲しい部分、読んで欲しい箇所を強調するようにしている。

つまり、何故この資料を選定して展示するのか、その意図や鑑賞すべきポイントを明示するようにしたい。

第3に、資料の内実をどれだけ調査したのかを示すことである。先の当館企画展示では、明治期勝山(真庭市)の河岸から鳥取県根雨(日野町)の鉄が積み出されていたことのわかる資料を展示し、解説文にはその情報を記した。水運をテーマとした展示の趣旨でいえば、それで充分かも知れない。しかし陸路の根雨一勝山間ほどの道であり、どのようにして運んでいたのか、その距離は、量はどのくらいあったのかなど、内容に踏み込んで、その時代背景や状況の説明をわたくしは求める。可能な限り現地踏査や証言者取材の経験が必要だと考えている。経験しておけば展示説明会などで生かされるからである。それは担当者の財産になるのみならず、ひいては展示観覧者の知的資源へと転嫁できる。

つまり、展示資料と一番向き合っている担当者は、そこから得られる情報、疑問等をしっかり調査研究すること、そしてそれを発露してはじめて「展示叙述」になることを強調したい。

以上の要件は、展示する際の基本的な心構えで、岡博協の諸兄姉にはいわずもがなのことであろう。ところがわたくしは、それを心構えに終わらせず、後世に伝えられる形あるものにして残したいと強く思っている。よい展示をしながら、列品リストしか残らなかったら、展示担当者の意図は伝わらず、後々の知的共有財産にはなりにくいからである。

そこで「展示叙述」することをおすすめし、その要件をあえて書かせていただいた次第である。

当館紀要の「展示叙述」はその一試論と考えている。

(*)吉田伸之「展示叙述について」(『歴史評論』第526号、1994年)

「異種館の交流事業の可能性をさぐる」

日時：平成25年3月21日(木)10:00-16:00

会場：岡山シティミュージアム 講義室

参加者：37名

基調講演 「ミュージアムをつなぐ」講師：清水文美氏(こども☆ひかりプロジェクト代表)

ミュージアムを繋ぐ新しいコラボレーションということで、「こども☆ひかりプロジェクト」を紹介する。2011年3月11日の大震災がきっかけである。呼びかけ人は私で、ミッションとしては東日本震災キッズ支援など。中身はオールミュージアム、オールジャパンで、キッズが夢を描く場と時を提供しようとするもの。

私自身は三田市にある兵庫県立人と自然の博物館(以後「ひとはく」と記す)で「run♪run♪ plaza(るんるんぶらざ)」を主催している。ここでは、ママの目線で子どもと自然と専門家を繋ぐというボランティア活動をしている。

「run♪run♪ plaza」の活動は、「ひとはく博士と行く ハチ北高原昆虫サマースクール」(5回セット7日間で32,000円)「昆虫アドベンチャー」(3~4年生で1泊2日12,000円)プログラムも開催。また「パパと一緒に昆虫アドベンチャー」は1日だけで、明石公園にてパパと一緒に活動するプログラムである。他にも「キッズサンデー」をひとはくでは第1日曜日に開催しているが、それに合わせて「run♪run♪ Sunday」も開催している。

上の3つは昆虫に関するものであるが、「run♪run♪ plaza」にはひとはくのアドバイザーがいる。ひとはくの研究者は昆虫の専門家である。その方といっしょに始めたということがあって、昆虫プログラムになっている。しかし私自身は昆虫が好きなのではなく、自然愛好家でもなく、ごく普通にただ博物館が近いから行っているという、利用方法をしている。こどもが小学校1年生の時に博物館に行ってみた。難しすぎて何やっているか分からず、もったいない。近くの利用者として不思議だと思ったので、何か良い方法がないかということがきっかけでボランティアを始めた。「run♪run♪ Sunday」は幼稚園や小学校低学年、親子と一緒に参加してもらうプログラムである。それは主に博物館近くの公園でシャボン玉を飛ばしたり花を集めるなど、季節の中で遊ぶということをしている。そういうことが私の活動である。

震災から4カ月後の2011年7月、仙台市の六郷・七郷児童館にひとはくがキッズキャラバンで行くことになった。私がキッズのことをやっているので行かないかと誘われたが、そういう予算があるわけではなく、行きたかったら自分で行くようにということであった。その時、私が行って意味があるのかと悩んだ。阪神大震災と比べるとかなり瓦礫の処理があり、交通網や水が無いといったので、私がこのこと出掛けて行っても意味があるのかと。その時、現地の友達から今の惨事を見ておいてほしいと言われた。阪神大震災の時も、自分自身が目にし、復興などのことがよく分かったので、行ってみようという気になった。

子どもたちといろんなプログラムをしたが、そこで子どもたちと大

人の現状を知った。現地の子どもたちと会って震災後の壊滅的被害にあって、子どもたちが「耐えている」ことをひしひしと感じた。大人たちがざわざわしているときも、子どもたちはいつも通りのような生活をし、現実是非日常的な生活になっている。今までのような普通の生活は程遠いなということが実感だった。東日本大震災時も世界中から多くのレスキューが入った。文化財レスキューの方もいるというように、いろんな形の復興支援があった。第一に生活を立て直さないとけないということで、大人たちの支援が優先される。その中で大人たちは子どもたちの夢を考えることはない。私はこどもたちと話をすることで、子どもたちは耐えているということがわか

った。子どもたちには夢をもってもらいたい。夢を考える余裕がほしい。子どものころの夢というのは、幼稚園の先生であったり、水泳の選手、医者などいろんな職業を考える。子どもたちの夢は成長過程で変化してゆく。子どもたちの夢は、健全で安心できる日常生活の中で、いろいろな体験を通して育まれて行く。震災によって非日常が日常になってしまったことで、非日常の中に想像する世界や夢があったのに、それが日常になったら何もできない。東日本大震災は屋

間に起きたため、津波の被害によって家族がばらばらになってしまい、阪神大震災とは被害が違う。津波の被害によって沿岸部は何もなくなっているが、内陸の方、例えば仙台市では夏のバーゲンをしている店があったりして被災地とは思えないほど復興している。沿岸部はひどいのに内陸部に入ると普通に生活をして、被災地には差がある。そこに非日常が日常的になっている子どもたちがいる。

ミュージアムには宝物がいっぱいあるから、その宝物を使って何か子どもたちの夢を育めるものがプレゼントできたらと思った。子どもたちの興味関心には、自然系、科学系、美術系とかはあまり関係ない。私にとってミュージアムワールドは、楽しいしわくわくドキドキする。これに大人も子どももいっしょに繋がっていったらいい。「こども☆ひかりプロジェクト」は繋がって行って支援し、寄り添いながら10年継続しようと思っている。ボランティア活動を通じてミュージアムやいろいろな人と繋がっていったことで、「こども☆ひかりプロジェクト」ができたと思う。

ボランティアを始めて18年になるが、ひとはくの中だけで活動をしていたのが、他の博物館などいろんな所に行き、学芸員や研究員のひとたちとつながっていった。兵庫にいながら、九州国立博物館の人とか、日本科学未来館の人たちと繋がっていったのは、ボランティア活動のお陰と思う。その中で、素敵な人たちとお付き合いをさせていただき繋がっていたことがもともになっている。

いよいよ2012年6月、キックオフ。「こども☆ひかりプロジェクト」がスタートした。最初に仙台メディアテイクで「こども☆ひかりフォーラム」をした。二部構成で、一部は事例報告、二部はパネルディスカッションということで各館の館長にお話を伺った。翌日から2日

間にかけて、「こども☆ひかりフェスティバル」を仙台市科学館と翌日「子どもの夢を育む～福島こむこむ館」で開催。各館600人分の材料を用意はしてきたが、あまりに人が多く30分位で無くなってしまった。12くらいのブースがあって、どこもすごく楽しい。「みんぞく部」は、九州国立博物館から馬頭琴やこまあそび、南蛮屏風など。「おさかな部」では、アクアマリンふくしまが移動水族館を持ってきて、江ノ島水族館の方がスタッフとして入る。最後尾1時間待ちになるほどだった。「いきもの部」では明石市文化博物館とNPOこどもとむしの会が、「移動昆虫館」を開催、ホテルを見て大喜びした。いろいろな分野の研究のひとはくからは植物の専門家による「いろいろな種で遊ぼう」などを行い、仙台市太白山自然観察センターといっしょにひっつき虫のダーツを作ったり、サイエンスコープで大きくして見たりした。「かがく部」では、ひとはくと東北ユースたちによるアンモナイトなどの化石のレプリカづくりなど。「びじゅつ部」は大原美術館、石橋美術館、福岡アジア美術館、愛知陶磁資料館、東北芸術工科大学や福島大学の学生らと連携して大きな絵をかいた。子どもたちは自分のやりたい放題。汚れた手足を洗って拭いてあげるのが大変だった。子どもたちが今までと全然違う表情をしており、汚れても楽しそうであった。「かがく部」では日本科学未来館によるハイスピードカメラで映像を見た。水風船が割れる瞬間を映したもので、水の形が見える。「グラスハープに挑戦」で水の深さによる音の違いも体験してもらった。「てんもん部」は、西はりま天文台公園や姫路科学館、仙台市科学館と一緒に「望遠鏡で空を見てみよう」コーナーで、太陽観察ボックスを作ったりした。



このようなプログラムをして「こども☆ひかりフェスティバル」は、被災地の子どもたちに喜ばれた。ミュージアムには力がある。その力によってプロジェクトは機能することを確認した。

キッズ支援に参加したスタッフの方が、子どもたちの笑顔に癒された、子どもたちから元気を貰ったと言う。それは結果的にミュージアムのためであり、自分のためにもなっている。キッズ支援が本来の目的だが、ある方から自分のためにやっていることも必要な条件であると言われ、それもあたりだと思った。

大人もこのようにして、キッズ支援の中からミュージアムの力を発揮してきた。「こども☆ひかりプロジェクト」のメンバーも嬉しさを実感できたし、福島のミュージアムは「前向きになった」と言う。参加した親子は、「子どもの夢をはぐくむ施設・こむこむ館はこうでなくちゃ」と言っていた。自分たちが自ら福島の子どものことを考えてやってゆこうと思った。

このように動き出す初期段階から、ミュージアム同士、隣同士、隣の隣へと繋がってゆく。新しいイメージを持って行けば違ったコラボレーションができるのではないかと。「こども☆ひかりプロジェクト」のようなものを使って、隣同士でなく、隣の隣、そしてまたその人々に賛同して繋がってゆくの「こども☆ひかりプロジェクト」の大きな特徴である。

例えば、今「2個にこプログラム」というものを考えている。福島は自然素材がないので、マツボックリを一人2個集めて福島に送るプログラムである。身近にある松ぼっくりで、だれでも参加できるプログラムになるのではないと思う。また石ころ、泥団子で遊ぶプログラムの要望もあった。プログラムを動かしながらその仕組みづくりを考えるのもいい。全国、どこにでもあるものを集め、各地にチームを作り、また成果を発信したい。「こども☆ひかりプロジェクト」はもっといろいろなことをやってゆきたい。

プロジェクトの組織について。

今年1年は任意の団体でやっている。まだ未熟な組織ではあるが、地域ごとに九州チーム、近畿チームなどと分かれており、テーマごとに分かれることもできる。実際に動かすにはお金があるのであるが、経理は透明性を高くしていきたい。皆自ら進んで役割分担してやっている。意思決定のしきりはまだ確立していない。地域、テーマで分かれ、NPOをつくるようになるのかな、というようなイメージはある。

はじめ被災地支援を目指したので集まりやすかったが、いろいろなことをやってみた。キッズ支援のみでなく大人の人たちがコラボレーションすることはいい傾向だと思う。

ひとはくとrun♪run♪plazaのコラボレーションについて。

ひとはくは20周年を迎えたので、ボランティアからプレゼントを企画しようと考えた。10周年の時は、日本科学未来館の毛利館長に来てもらって、中高生向けの宇宙をテーマにした講演会をプレゼントした。20周年は、3歳から小学校3年生の親子50組で、折り紙飛行機を飛ばそうというプログラムを考えた。「飛ぶ」という言葉をキーワードに、ひとはくの種子、鳥、昆虫の各研究員からリレートークをもらったのち、JALとのコラボレーション。JALからは装置を見ながら飛ぶしくみの話。そしてJALの5種類の紙飛行機をつくってホールで飛ばした。JALはすごいなと思ったのは、チラシ配布の翌日からいっせいに応募があり、多くの人が集まったこと。企業とコラボすると、すごいことが起きる。JAL側も、ミュージアムとコラボするのは初めてで、喜んでた。

もう一つは、1年に1回「run♪run♪salon」を開催している。「キッズ」をキーワードに、ミュージアムに関係ないこと、例えば絵本の先生など来て頂いて話をしてもらい、お茶を飲みながらミュージアムを楽しむというママのサロン。今年度はひとはくをもっと楽しむために、副館長に調査研究で海外に行った話をしてもらい、「てのひら地球儀」(学研)を制作しながら親子で話すという企画もした。

身近な博物館とコラボする、近くの企業とコラボする、オールジャパンでコラボする大きなものもやってみた。夢があり、そういう人たちがいれば絶対出来る。なんたってミュージアムには「もの」があるからできるというのが私の実感。まだまだもっともっと楽しく広がっていけることはいっぱいあると思うので、ぜひ、岡山の中だけでなく、「こども☆ひかり」を通してでもいいので、日本中、皆でできたらいいなと思う。

学芸員のような立場でその施設に属するのではない者が思うことは、利用者の目線で考えること。いろんなものが繋がっている方が、相乗効果があってよい。目線を変えて皆さん自身が楽しんで交流することで、利用者、市民、県民が得をすると思う。最初の一步が大変かもしれないが、楽しいコラボレーションをして頂ければと思う。

< 質疑応答・感想・意見 >

鬼本佳代子(福岡市美術館): 補足であるが、「こども☆ひかりプロジェクト」は青森から長崎まで全国の人たちが清水さんを媒介につなっているプロジェクトである。学芸員は自分の館のことをまず考えるが、ユーザーという立場の清水さんが中心になったからこそ「こども☆ひかりプロジェクト」は実現した。「こども☆ひかりフェスティバル」はとてつもなく強行なスケジュールで大変だったが、皆それぞれのコネクションを駆使して、非常におもしろいものになったと思

う。震災のことも2、3年たつと忘れてしまいがちだが、10歳の子が20歳になるまで10年続けようということで行っている。

渡辺浩美(高梁市成羽美術館): 成羽町美術館は児島虎次郎を中心とする近代絵画と、古代エジプトの考古資料、化石室という異種複合体のような館。美術も自然史も考古もある。「〇〇系」とくくることが多いが、ここにはこだわりはない。館の事業にはワークショップや大学との連携もある。「こども☆ひかりプロジェクト」に共感することが多かったが、活動資金はどうされているのかをお聞きしたい。

清水: 最初はゼロだった。ボランティアが自主的に動くところから始まったが、多くの人を巻き込んで各地でフォーラムやフェスティバル、となるとそうはいかない。「子どもゆめ基金」からいただいた助成金約200万円は、ほとんどが旅費。パンフレットに振込用紙が入っているが、応援基金一口500円。1家族4人で2,000円くらいのイメージであり、一人一人が参加して応援できるよ、という額。応援してくれる人々から振り込んでいただき、被災地の方からもいただくこともあり、全部で70~80万円。大きい施設からの参加は自主財源。このパンフレットも、印刷会社のご厚意で後払い且つかなり値引きしてもらっている。2013年はいろんな助成金を申し込んでいる。企業との共催や研究団体とも。キッズやミュージアムへの応援をさせてもらうので、NPOにすれば、というご意見もいただいている。

今年度は300~350万くらい動いているが、2013年は500~600万くらいの規模で動く予定。「こどもゆめ基金」は出るかどうかの結果がわかるのがかなり事後で、立て替えるための資金集めもしないといけないのが大変である。

九州国立博物館・三輪館長からアドバイスをいただいたが、助成金やファンドをもらえてよかった、だけでなくファンドを育てることが必要。「子どもゆめ基金」は大変だが、主旨には合っているので、今年度も申し込む。今年度は仙台科学館での開催ではなく、あえて沿岸部の何もなかったところでの開催を計画しているので、もう少しかかる見込み。仙台市内はすでに復興が進み普通の生活ができているが、沿岸部はまだ立ち直っていないし、子どもたちもバラバラな状態である。沿岸部の何もない「仙台市農業園芸センター」というところを会場として想定し、机、椅子のレンタルや貸切バスを借りるために予算が大きくなっている。危険な企画運営に思われるかもしれないが、お金があるからやるのではなく、やらないといけないと思うからやるのである。

渡辺: 予算があるからするのではなく、ドリームプランから入ってそこからしなやかに対応していけるのがいいんだと思った。

狩山俊悟氏(倉敷市立自然史立博物館): 役所的な発想ではないと思った。役所はまず予算の範囲内とか、つながり、窓口、旅費や謝金などと考えてしまって動きにくい。清水氏のお話は、個人のレベルでミュージアムを動かすという画期的なもので、目からウロコという感じを受けた。大きなものを動かす原動力となっているのはいったい何なのか、教えてもらいたい。

清水: 私自身、ミュージアムに特別な思い入れがあるわけではない。ナチュラルでもなく昆虫に興味も無い。「子ども」が大好きなだけ。子どもたちがのびのびと思いつき好きなことをして大きくなってもらいたいというのが自分にとっての原動力。ミュージアムは子どもたち



が夢について考える場を提供する場所。素直に元気に育ってほしいというのが私の夢。

福富幸(岡山県立美術館): 岡博協加盟館にはボランティア組織のある館がいくつかある。清水氏の関わっているひとはくのボランティア組織、館、「こども☆ひかりプロジェクト」の3者の関係についての説明を聞きたい。

清水: ひとはくの研究員からは、元々ひとはくにボランティアは必要ないとされていたが、養成講座を経て立ち上がった。ボランティアという名ではなく、「みんなでつくる博物館」と名付け、「自分たちのことは自分たちでやるならいい」、となった。ボランティアは、モチベーションが上がるとミュージアムにとってよい存在だが、下がると重苦しい存在になる。そのマイナスを察知して「ボランティアは不要」とされたのではないかと。国内でボランティア・任意団体企画の32,000円のプログラムは最高額のはず。ひとはくのいわゆるパートナーである。お互いをサポートし共鳴し合う立場である。「run♪run♪plaza」は始めて8年。その前にNPO法人「人と自然の会」というのもやっていたが、NPOになると大きな組織になり、その会の運営自体もメンバーのコーディネートもしなければならなくなり、自分のやりたい子どもたちとのプログラムができなくなる。NPOの運営がうまく行きだしたので、私はNPOをやめ、「run♪run♪plaza」

を立ち上げた。これはママの目線で子どもと自然と専門家・ミュージアムを結びつけるのがミッション。これに対し「こども☆ひかりプロジェクト」は震災復興支援に始まり、自然に限らず子どもの夢や可能性を広げようという活動で、「run♪run♪plaza」とは全く別の活動。また大きなお金が動き、受益者負担とはならないだろうということで新たに作った。事務局はひとはくに置いているが、助成金等の連絡は私のほうになるようになっている。そういう3者の関係である。

ひとはくのボランティア組織は「人と自然の会」の一つだけであったが、それだと入口が一つになってしまうということで、博物館が市民との連携活動を認め、今は20数グループが横並び状態である。「run♪run♪plaza」の他にも「鳴く虫研究グループ」「地学研究会」などの各グループに研究員2名がアドバイザーになり、ひとはくと連携できる組織となっている。

< 事例報告① > 新見美術館 藤井茂樹氏 「恐竜の化石展、昆虫展、刀剣展などの取り組み」

夏休み期間中に、子ども向けの展覧会の開催をしてほしいとの新見市からの依頼があり、恐竜展を開催することにした。以前から非常に珍しい地元の「シバタヌマガメ」の化石も隠れメインとして展示したいと思っていた。県北から目の情報発信はなかなか困難なことだが、「美術館で恐竜展」という意外性でマスコミも注目してくれるのではないかと考えた。「どこでも博物館」を主宰する笠岡市カブトガニ博物館の副館長の惣路氏に協力を依頼した。県北での開催ということで、県北に住む幼児のみならず小・中学生、大人の入館者も期待できると考えた。展示内容は恐竜化石を中心に、地球誕生から人類誕生までわかりやすく化石で紹介できればという希望を話した。恐竜の画家で子ども電話相談パーソナリティでも有名なヒサコニヒコ先生の恐竜原画21点も、合わ

せて展示するという形をとった。ヒサ先生の「恐竜を描こう」というワークショップも開催した。「シバタママガメ」はコレクターの意向で出品がなわなかったため、他に目玉として恐竜ロボットの出展も考えたが、借用先が岐阜県のため借用に行く輸送費が難しく諦めた。当時林原自然博物館副館長の石垣忍氏と新見市長が懇意であったため、恐竜の複製模型借用をお願い、ディノクスという肉食恐竜の復元模型2体をお借りできた。

展覧会開催にあたって、「子と親の鑑賞ガイド」を作成した。市のとある社団法人から助成金をいただき作成し、市内の小学生全員と来館者に配布した。鑑賞ガイドの内容は、Q&Aや化石ができるまでのイラスト、ヒサ先生のイラストなどを掲載した。

(展示風景をスライドで紹介)会場内のアパトサウルスの足跡、恐竜ディノクスの骨格模型(岡山市立カブトガニ博物館所蔵)、アンモナイトなど化石の展示、恐竜の展示、子どもたちにぎわう様子、ヒサ先生の講演会、恐竜を描こうワークショップ(参加者35名)風景、ヒサ先生の絵(完成品は当館に寄贈された)。ワークショップでヒサ先生は完成した子どもたちの作品1点ずつ講評してくれた。

恐竜展開催時に、当館と倉敷自然史博物館とおもちゃ王国の3館がたまたま恐竜展を同時開催しており、そのニュースは産経新聞に掲載された。

次に「昆虫展」についてお話しする。新見市周辺は石灰岩地帯なので、昆虫宝庫。金ボタル、ウスイロヒョウモンモドキなど珍しい昆虫がいる。昆虫は子どもたちが興味を持ちやすいので、親子で来てもらいたいと考え展覧会を開催した。きっかけは恐竜展開催時に、元鳥取県立博物館の田村先生から岡山昆虫談話会の三宅氏を紹介してもらったことにはじまる。展示として昆虫標本と、新見市出身の自然写真家の難波由城雄氏と新見市哲多町に来新されたことがある昆虫写真家の栗林慧氏に協力をお願いし、昆虫写真展示をすることにした。

展示内容は、標本コーナーでは日本の昆虫、世界の昆虫、岡山の昆虫、新見の昆虫というふうにテーマ分けし、昆虫写真のコーナーでは量1畳分ほどある写真を展示した。

標本をつくるワークショップも開催し、岡山昆虫談話会の人に指導してもらった。

成果としては、普段あまり来館しない層に来館してもらうきっかけ作りになった。作家や借用先など、人と人のコミュニケーションが得られ、知識の幅も広がった。また絵とは違う展示の方法が勉強になり、応用がきくようになった。

課題については、来館者が多いときこそ館蔵品を見てもらいたいが、紹介するスペースが無かったのが残念だった。入館者数をみると、特に子育て世代が少ない。スポーツ観戦は料金が高い割に子育て世代が多いことから考え、美術館・博物館へ行きやすい環境作りが必要ではないかと思う。そういう意味では、恐竜展と昆虫展の開催は、効果があったように思う。

市内には3000人の小中学生がいるが、パスポートを持ってくれば入館無料である。近年では半数となる、のべ1500人程度の来館がある。子ども向け展覧会の開催の成果であると思う。

<事例報告②>勝央美術文学館 野村英子氏 「貝や化石の研究発表展について」

当館の展覧会の内容等については、新見美術館の藤井氏の

発表とダブる部分が多いので、重ならないフィールドワーク等についてお話ししたいと思う。2010年の夏休みから11月にかけて、「貝と化石の物語」を開催した。勝央町は県内有数の化石の産地で、ピカリアや大きなカキの化石等よく発見される。夏休みに子どもたちがフィールドワークで化石を発掘し、子どもたちなりに発表、展示をするというのが企画の内容である。

当館は美術文学館なので化石については素人だが、近くに奈義ピカリアミュージアムという化石の専門館がある。また化石の展示だけでは物足りないと思い、現世の貝を展示することとし、岡山シティミュージアムのご協力もいただいた。また建部町のタカヤコレクションも借りることとした。(スライド)奈義ピカリアミュージアム、タカヤコレクションなどの画像である。シティミュージアムにおられた岡田氏と相談、町内全域で化石

が採取できるが、町内の子どもに経験させたいと思った。(スライド)募集チラシはこれで、講師は「どこでも博物館」の森本一弘氏と定兼充氏に解説をお願いした。

「勝央化石探検隊」の子どもたちに配布したフィールドマップについて。ポイントのみ書いてあり、あとは自由。当日撮った写真を後で貼ってもらうようにした。

本当は化石を採取してはいけませんが、先生の説明を聞きながら化石を身近に感じ、親子で観察会をした。奈義ピカリアミュージアムでは、館長さんから化石ができるまでの説明を聞いた。新発見は持ち出し禁止。参加者の研究成果は、後日美術館で展示を行う。夏休み中に作成したフィールドマップと化石の標本を持ってきてもらった。職場体験の学生に展示準備、パネル作成なども手伝ってもらった。併せて勝央町と交流のあるモンゴルからお借りしている恐竜の卵の化石を展示。

成果について、地域資源を生かした企画を実施することができた。他の専門館のご協力を得ることができた。美術展とはひと味違う小学校高学年男子にも好評を博した展示ができた。ジャンル外のものも果敢に挑戦していきたいと思う。

<事例報告③>福岡市美術館 鬼本佳代子氏 「大原美術館と倉敷市立自然史博物館の連携事業」

1997年から2008年まで福岡市美術館に勤務した後、大原美術館に約5年間勤務、2012年9月から再び福岡市美術館に勤務している。ここでは、大原美術館勤務時代に倉敷市立自然史博物館と連携した活動についてお話しする。大原美術館の敷地内には、明治26年、倉敷紡績の初代社長大原孝四郎氏の別荘として建設された「新溪園」という日本庭園がある。これを、子の大原孫三郎が倉敷市に寄贈。現在は、庭園内にある広大な茶室「敬徳堂」とともに、一般にも公開されており、開放感のある空間でお茶会なども開催されている。2009年、大原美術館と倉敷観光コンベンションビューローとクラレテクノの3者が合同で指定管理者となるにあたり、大原美術館が新溪園で企画をすることとなった。せっかくなので、庭の植物とアートを組み合わせたい企画を考えたいということで、倉敷市立自然史博物館の狩山さんに相談に行った。それが連携のきっかけである。実は、福岡市美術館、北九州市立美術館との連携事業で、両館が建つ公園の植生比較をしたことがあり、そのときにはいのちのたび博物館の植物担当学芸員に協力してもらったことがある。そういう経験があるので、すぐに倉敷市立自然史博物館に相談に行こうということになったのである。こうして2009年の

6月と10月に自然史博物館の狩山さんの協力のもと、ワークショップ「植物のかたち それには深いわけがある」を開催した。ワークショップは、まず「何も見ずに花を描く」ことから始まった。参加者の皆さんは悪戦苦闘。簡単そうで意外に描けない。その後、狩山さんの解説付きで実際に植物を観察した。そして、今度は大原美術館で展示中のモネの《睡蓮》を鑑賞。狩山さん曰く「植物学的にはでたらめである」とのこと、「名品」を前にした参加者はその言葉に愕然となった。しかし、一方で、モネが形ではなく色に興味があったことが参加者にも実感できる体験となった。さらに、ピカソの《頭蓋骨のある静物》については、「植物学的には正しい」とのこと。「ピカソの描く絵はぐちゃぐちゃ」という参加者の先入観を見事裏切る言葉であり、ピカソの形態に対する鋭さを認識する体験であった。このように美術と自然史という両方の視点で作品を見ることで、より豊かな鑑賞体験を、参加者は享受することができた。なお、10月には種を飛ばしたり、6月と同じような形で現代アート作品を鑑賞した。

もう一つ「新溪園」での企画で、色材についてのワークショップを紹介したい。これは、絵画の素材について知り、考えようというワークショップである。2009年に、「色の博物誌」など画期的な展覧会で有名な目黒区美術館のエducーターの方に講師で来てもらい、土から絵具をつくるワークショップを実施した。ここで紹介するのは、その応用編として翌年実施したものである。内容は、最初に、作品鑑賞をしながら、参加者に「自分の好きな色」の話をしてもらう。それから、持参してもらった自分たちの住んでいる場所の土をそれぞれ見比べる。「岡山の土」「倉敷の土」などちょっとずつ違う。さらに鶴形山で土の採取をした。これらの土をそれぞれフライパンで焼き、すりつぶす。それにメディウム(膠・油・アラビアゴム・卵黄など)を加えると、あら不思議!絵具の出来上がりである。参加者は、土やメディウムによる微妙な色の違いを楽しんだ。そして、これからが肝心。このワークショップは2日間あったのだが、2日目には、倉敷市立自然史博物館に行き、地学専門の武智泰史さんに18世紀に人工顔料ができる以前は天然の鉱物等でどうやって絵の具を作っていたか等の説明を聞いたあと、ラピスラズリや孔雀石などで実際絵具を作った。

このようなワークショップの他にも、大原美術館の植物マップを作る際に、狩山さんにご協力いただき、学芸員だけでなく、そのほかの職員とも交流があった。

成果としては、それぞれの館の利用者に、一元的でなくより豊かな学習機会を提供できたこと。もう一つの成果は、お互い培ってきた教育スキルを交換できること。

課題としては、人文系で特に言えるが、資料の希少性が高く移動が難しいという壁があるということ。もう一つはイベントごとの連携になって、継続性が少なく、時間的空間的広がりまで至っていないことである。本当の連携はまだまだこれからである。

最後に、福岡市美術館では、2013年秋に福岡市動物園と連携し「美術館で Zoo」という所蔵品を使った企画展を開催する。大きな動きとしては福岡でアジア動物園教育担当者会議があり、そのテーマは人文系と自然史系の教育連携。福岡市美術館としても参加協力する予定である。

<パネルディスカッション>

コーディネーター：鬼本佳代子氏(福岡市美術館)、パネラー：清水文美氏(こども☆ひかりプロジェクト代表)、狩山俊悟氏(倉敷市立自然史博物館)、藤井茂樹氏(新見美術館)、野村英子氏(勝央美術文学館)

鬼本：狩山さんから自己紹介をお願いします。

狩山：倉敷市立自然史博物館の植物担当の狩山です。事務局が行ったアンケートについての感想だが、人文系と自然史系との連携が意外と多いということがわかり、意を強くしている。自然史系の博物館の基本は調査研究で、それに伴い資料の収集保管をし、その成果として展示・教育普及をしている。勝央美術文学館の本日の発表はまさに自然史系の博物館が行っていることと同じである。新見美術館も絵画教室や標本作りをされており、標本作りは自然史系以外の館がされていることを初めて知った。自然史系博物館は岡山県下では大変少なく、当館には地学・植物・昆虫・動物の担当がいて自然史系の総合博物館である。県下では同様の施設はないため、県内ではなくもっと広域の西日本自然史系博物館のネットワークの交流はあったが、人文系の歴史や美術館との交流は今まで少なかった。異種館交流としては、①出版物や広報物(催し物案内)案内の交換、②標本の貸出(昆虫やナウマンゾウ、写真等の貸出(デジタルデータが多い)、③企画展の同時開催などが挙げられる。倉敷科学センターが最初に恐竜展を企画し、倉敷市立自然史博物館がそれについた。同じ年に新見市美術館とおもちゃ王国、倉敷市立自然史博物館と倉敷市科学センターの4館が同時期に開催した。マスコミが注目してくれて、倉敷市立自然史博物館は過去最高の入館者数になった。昆虫展の時は、昨年倉敷科学センターが当館と両方に来館すれば景品がもらえるというクイズラリーを開催してくれたので、お客さんがかなり回ってきてくれた。④番目に職員派遣がある。倉敷市立美術館の写真展の時に、当館の昆虫担当が解説を担当したり、美術品に描かれている花の種類を教えてほしいとの依頼があったり、大原美術館との連携があったりする。謝金をいただくことはない。その他、西日本のネットワークで、「子育てがもっと楽しくなるミュージアムづくり研究会」があり、できるだけ小さい子どもたちを連れて来てもらおうとする取り組みがある。新聞報道や清水氏のお話にもあったように、文化財レスキューでは、いろんな博物館が協力しあって、連携がはかっている。

年に1度行う当館独自企画の展覧会は、これまで単館でずっと取り組んできたが、今年1月玉島市民交流センターという新しい施設があって、当館での展覧会終了後、そこを会場として同じ展示物(2割減)で展示させてもらった。館内で完結していた展覧会を外で開催するということがあった。

今回の事例報告では、子どもがターゲットである場合が多かったが、普段おつきあいがないと、なかなか情報が伝わってこない場合が多い。昨年シーボルトの展覧会を津山洋学資料館で開催していたが、その情報を最終日の前の日のニュースで知り、最終日になんとか行くことができた。情報伝達の重要性を強く感じた。

鬼本：どうやって化石の専門家を見つけてきたのか、もう少し詳しく教えてほしい。

藤井：新見市の知人の職員から聞いた。その職員が勤務している「まなび広場にいみ」という音楽ホールに出入りしているイベント業者が、「どこでも博物館」主催の無料で化石を貸し出しする企画を持っており、いつかその恐竜展を開催できればと考えていた。

鬼本：奇遇な縁という感じですね。

野村：搬入搬出の時の日通さんと世間話をしているときに、あそこはこういうのを貸してくれるよとか、こういう企画もってるよとか。

鬼本：こういう企画をやりたいと常日頃から話しておくよいですね。

そういう機縁をつくる立場の清水さんから、こういうふうなコミュニケーションをしておくといいですよ、などあればお聞きしたい。清水さんはどうやっていろんな人たちと知り合っていたのか。

清水：私の生き方もいうべきこと。「こども☆ひかり」を今後どうしていくかなどと鬼本さんと話をしていた。いろんなアイデアとつながりを求めて私のところに来てくれる人がいる。「この人だったらうまくいく」という「直感力」を磨いて残していくとよい。いい人だなと思ったら、とことん連絡をとる。

鬼本：たくさんの人に会わないといけない。「たこつぼ学芸員」みたいにこもってばかりいないで、どんどん外に出て、多くの人に会っているような知り合いを増やしていくことで、直感力も磨かれていくのだと思う。自然史系ではユーザーを大事にした活動が多くしていらっしゃるが、その辺のお話を。



狩山：学芸員だけで調査・資料収集活動ができるわけではない。アマチュアや興味関心を持っている人たち、研究者や博物館に理解を示してくれる人などいろんな人とおつきあひが必要になってくる。その中で様々な新しい事実が発見されたりしていくわけだが、いかに皆さんから寄せられたものを皆さんに還元していくか。それが展示会であったり、マスコミでの新事実の公表であったり。大勢の人に関わってもらい、それを自分たちの中だけに留めず社会に還元し、また新たに人の輪ができていく。学芸員のファンのような人が集まり友の会に発展していったのだが、友の会は独自の活動をしていて私たちもそれに参加させてもらっている。友の会に依頼することもあるが、依頼されることもある。「いっしょにやっている」という感じである。子ども大好き、虫・植物大好きといういろんな個性の人々つきあっていくかは自然史系博物館にとってとても大事なことである。

鬼本：ユーザーの声をちゃんと拾って、対等な立場でやっているというのが自然史の強みであり特徴であると思う。やはりユーザーの声を聞かないといけないという話を、成羽美術館の渡辺さんと話したことがあったが、いつもの美術系の展示会と比べて、事業と来館者の反応に、違いとかあったか、藤井さんと野村さんにお聞きしたい。

藤井：普段は40代後半の来館者が多いが、自然史系だと40代以下も増える。小規模館なので、お客さんと接する機会が多いため、来館者の感想として、子ども向けのイベントはありがたいと言われる。県南で開催される恐竜展にはなかなか行けないが、新見でやっていただけるのは嬉しいとの地元の声もある。

野村：小学校高学年から中学生の男子という美術館に来ない世代をターゲットにするため、自然史系の展示会を開催している。確かに普段と全く違う年齢層の世代が来館し、結構騒がしい。「静かにしてね」とお願いすることもあるが、いつも静かな美術館と違って楽しい感じがする。

鬼本：ユーザーの立場からのお話を清水さんをお願いしたい。美術館は高齢者で、若い子は自然史系というのはなぜなのか？美術館と博物館のイメージの違いというのはあるのか。

清水：どちらも敷居が高く「わざわざ行くところではない」という感じがする。大勢のボランティア親子といっしょに博物館に行くが、「静かにしないといけない」美術館はつらい。ストレスになる。親にも「博物館は暗い難しい」というイメージが既にインプットされている。自然史だから子どもが多いかという必ずしもそうではなく、プログラムだと思う。昨年夏「むしむし体験」というプログラムを10日間通して行った。子どもたちの驚きの声が館にひびいている。毎日来られる方もいる。館内全部静かに、は無理だが一部の部屋をちょっと声を出してもいい企画室にすればもっと行きやすくなるのではないかと。学芸員さんは、展示の企画については自信を持ってされたいし、facebook等で展示のおもしろさをどんどん発信されたい。「なぜ静かにしなければいけないか？」という疑問はあるが、静かにするものだろうと思って静かに見ることでの子はいい。しかし、「絵ばかりでおもしろくない」という子には少し会話をしながら鑑賞したら、もっと好きになってくれるのではないかと。大原美術館のチルミュは、友達同士で参加できたりしていい企画だと思う。

鬼本：余談であるが、福岡市美術館では「美術館ではなぜ静かにしなければならないのか」ということが話題となっている。おもしろい作品の前ではしゃべりたいよね、ということで禁止事項の見直しをしている。古い『博物館研究』を見ていたときに、「美術館では静かにしたほうがいい」というようなコメントがあり、このような考えは戦前からあったのか、と思ったが、変えていってもいいのではないかと。連携することのメリット、課題、可能性について、もう少し深くお話しいただきたい。

狩山：自然史系の敷居が低いもう一つの理由として、「館内撮影OK」というのがある。ブログやツイッターで情報をどんどん広げてくれたほうがありがたい。連携する意義は、学習機会を持てるということ。市内の近い距離にいろんな施設があるので、館内で美術や歴史の展示という発想は起こりにくいのだが、館内に来てくれる人を増やすには、他分野のイベントを組み込んでいくのは有効かなと思う。当館の資料の貸出はとても簡単で、申請書のハンコは不要。自然史系の資料を借用希望の場合はどうぞご相談ください。人とのつながりは大切で、こういう研修会で顔を見て話ができるのはありがたい。こういう機会を生かして交流していきたいと思う。

藤井：自然史系の展示会をしたことで、来館者の層が広がったと思う。「時間に余裕がないから行けない」という人は、年をとっても美術館には来ないと思う。将来的なことを考えて来やすい状況をつくる必要がある。自然史系とのコラボは良かったと思う。また専門外の勉強ができたことはためになった。一番よいのは、人とのつながり。美術館同士のつながりはあっても異種館の交流というのは少ない。展示会後も自然史系の方に助けていただくこともあったので、学芸員として幅が広がったと思う。本来は、先日倉敷市立美術館で開催されていたような、「コレクション展 こどもびじゅつかん ーびじゅつはかせになろう!」のような展示会をしてみたいが、小規模館で、しかも財団法人の事務や、今は公益認定の移行申請までしており、一つ終わったら次、一つ終わったら次、というような状況が続いている。子どもたちを含め来館者の層を広げるには自然史系とのコラボは必要だと思う。

野村：もともと科学系が好きなので、これとこれをくっつけたらどうなるか、などと常に考えている。私自身の趣味とも言える。絵画作品について考えてみても、美術や文学だけでは解決できない問題がある。鉱物は展示できて生物は無理だな、とか考えたり、この人の協力があればこんなことができるな、とか、20年も学芸員をやっていると頭の中にいろいろなネタができる。そういう人に出会った時に「ぜひ今度こういうことをしましょう」という話になったりする。

清水：最初の思いつきを、少人数でいいから何かやって、それに参加した人からまた広がって行く。急がず、最初から大きなことを失敗なく、と考えてしまうとどうしても無理をしてしまうので、自分としての本流をくずさず、「かっこいい博物館」でいてほしい。利用者としては楽に流してほしいのではなく、元々持っているものを生かしながら、ちょっとした遊び心というか、軽くおつきあいをしながら広がって行けたら可能性を引き出せると思う。

鬼本：野村さんの「趣味です」という言葉がとても気に入っている。やはり自分が楽しくないと、見てる人も楽しくないと思う。学術的にもコラボのおかげで研究が進んだり、新しい研究分野ができる可能性も考えられるのでは。会場の方から聞いてみたいことは大学のお立場から、岡山大学の赤木里香子先生にご意見を伺ってみたい。

赤木：「こども☆ひかりプロジェクト」についてとても興味を持っていたので、このような機会に参加できて嬉しい。ユーザーの立場からミュージアムの可能性を引き出してくれる方がおられるということに対して非常に心強く思い、ユーザーが育つ日本になりつつあると実感した。次の世代のユーザーを育ててはいけない。美術教育専門の私であるが、美術に限らずミュージアムの持っている引き出しはたくさんあって、美術教員もそれを利用していかなくてはならないし、子どもたちに美術館博物館に行くとおもしろいよということが伝わるようなしなかけを作ろうと思っている。これまで大原美術館、倉敷市立美術館、岡山県立美術館等でワークショップやいろいろやらせていただいていたが、やはりせっかく岡山県博物館協議会のような場があるのだったら、岡山県もユーザーを巻き込みながらネットワークを作っていけたらいいのになと思った。学芸員の「何かおもしろいことをやりたいな」という気持ちがあっても「お金もない」状況でどうすればいいのか。やはり助成金を獲得したり、企業とのコラボももっと積極的にやったらいいのではないかと。地元のがんばっている企業もたくさんあり、地域資源を生かすようなアイデアを出したら地元がお金を出してくれるということもあるのでは。I氏賞のように・・・。

渡辺：地域間で異種館で連携ができるというのは、岡山県が博物館の数でいうとトップレベルにあり、博物館協議会にも70以上の加盟館があつていろいろな種類のミュージアムがあるという特性を生かして、これからの多様な連携ができるのではという希望の持てる研修会になった。複合館である成羽町美術館は、昨年化石室をリニューアルして「成羽の化石再発見」というテーマの展示をしている。化石産地見学会という、採集も含めた体験会を開催するにあたって、15名のところ40名以上の応募があつた。70代の夫婦や50代の友達など、大人が多く、親子の参加は5〜6組のみであった。子どもたちと同じような好奇心いっぱいの目をした大人たちは子どもたちに影響を与えるのではないかと。バラバラの年齢層の人が集まって、豊かな時間を持てたと思う。年に1回の開催だが、何か成果が出せたらまたご報告したい。「化石」や「恐竜」というテーマが、子ども向きとか夏休み企画という限られたものではなく、もっと幅広く

い魅力あるものと実感している。

古川文子(岡山県立美術館)：赤木先生がI氏賞の話を出してくださったが、そのI氏賞の事務局を担当している。人と人のつながりの大切さという話があつたが、I氏賞の伊藤謙介さんは成羽町出身ということもあり今日は、成羽町美術館の渡辺さんから化石担当の湯川さんを紹介していただいたり、貴重なご縁だなと思う。我が家には子どもがいて、美術館だと「また絵か」という反応だが、新見美術館や勝央美術文学館の企画は家族4人で楽しめるので、よく行っている。野村さんの「趣味です」という言葉にとても共感しているのだが、本人が楽しい気持ちで企画を考え、無理せず手の届くことから始めていくのが大切なんだなと思った。

遠山健一朗(奈義町現代美術館)：体感型の現代アート作品は、子どもたちも楽しく遊んだりして実感して作品を体感している。経験から作品を理解する。年齢層を問わないし、深く考えれば深まるし、範囲も広く、答えも無い。連携する可能性は開かれた美術である。

前野嘉之(倉敷市立美術館)：倉敷市立自然史博物館とコラボして写真家・今森光彦の作品展を開催した。譲れないのはクオリティの問題で、作家を説得しなければならない。土門拳賞を受賞した素晴らしいアーティストである今森氏の作品展である。子どもたちにアートの素晴らしさを知らせるために、自然史博の標本を借りて展示したいと考えた。クオリティは絶対落とさない。自然史博は高度なレベルの研究と優れた資料をお持ちである。今森氏の作品の被写体である、見ることでできないような世界中の珍しい昆虫の標本が自然史博にはある。自然史博の質の高い標本と、今森氏の優れたアート。なぜこれが必要なかということは今森氏に伝え打ち合わせをしてなんとか実現することができた。自然史博昆虫担当の奥島氏と、この作品にはこれが合うなどと精査し、奥島氏は標本の解説、今森氏の作品の魅力を伝えるのは私、というふうになんとか実現できた。2つの展示室の間の開放的な空間に標本を展示し、自然史博にも入館してもらえるようにした。コラボレーションというのは力が要るのではあるが、楽しいことなので、皆さんがんばってやっていきましょう。

鬼本：ユーザーは学芸員が力を入れてやっていることなどよくわかっているから、私たちは自信を持って手を抜かず展覧会や活動を作っていけたらと思う。



「文化財の取り扱いについて」

日時：平成25年11月6日（水）10：30～16：00

会場：岡山県立博物館

参加者：51名



特別展「Japan-漆の世界」鑑賞風景

- 10:30～10:40 開会
- 10:40～12:00 ①岡山県立博物館特別展
「Japan-漆の世界」鑑賞
解説：佐藤寛介氏（岡山県立博物館学芸員）
- 13:00～13:50 ②講演「岡山県の文化財行政の現状と課題」
田村啓介氏（岡山県立博物館館長）
- 14:00～14:50 ③「刀剣・甲冑」の取り扱い
佐藤寛介氏（岡山県立博物館学芸員）
- 15:00～15:50 ④「仏教美術（絵画・彫刻）」の取り扱い
中田利枝子（岡山県立美術館学芸課長）
- ～16:00 質疑応答・閉会

特別展「Japan-漆の世界」特別鑑賞会について

漆芸の魅力を紹介する本展は、もともと1フロアの企画展の予定でスタートしたが、全館使った特別展に昇格した経緯があり、全フロアで漆の世界を網羅するために様々な工夫を凝らしている。「第1章 Japanと呼ばれた日本の漆」では室町時代の蒔絵作品に始まり、桃山時代の高台寺蒔絵、南蛮漆器、幕末明治の輸出用漆器など漆器の歴史を紹介。

「第2章 岡山・香川の漆芸」では、岡山県と数年来連携している香川県の讃岐漆芸を、岡山県ゆかりの作品とともに紹介。岡山藩主池田家をはじめ備中松山藩主水谷家・板倉家、津山藩主森家・松平家、塩田王野崎家などに伝来した漆芸品の数々、岡山の漆芸家逸見東洋、高松藩主松平家

伝来品、高松の漆芸家玉楮象谷といったキーワードで名品が並ぶ。

「第3章 郷原漆器と備中漆」では、一度途絶えた郷原漆器の復興プロジェクトを制作工程とともに解説。「第4章 漆の美と匠の技」は現代作家の美しい漆芸作品の数々を紹介している。

佐藤寛介学芸員から、本展のコンセプトに始まり、学芸員として展覧会開催までに尽力された様々なお話を伺った。京都国立博物館、大阪城天守閣、大阪歴史博物館、清水三年坂美術館を中心とした京阪神方面、香川県内、岡山県内の3方面に借用先を絞って輸送費を節約し、予算を効果的に使用したことや、出品の承諾をいただくために配慮した点、博物館ならではの資料の見せ方など大変興味深い話が数々あった。

講演「岡山県の文化財行政の現状と課題」について

まずは富士山世界遺産登録、金山寺本堂全焼の事件といった文化財に関する最近の話題から始まった。続いて国宝吉備津神社本殿・拝殿の50年ぶりの屋根の葺替えなど、文化財の保存・活用の取り組みに関するお話。吉備津神社については、修理現場の公開がよい啓発活動になった。旧閑谷学校や津田永忠関連文化財の世界文化遺産登録への取り組み、岡山県内の文化財の保存修理事業の展開、有形文化財の指定推進など、様々な課題についてのお話を伺った。



講演「岡山県の文化財行政の現状と課題」



参加者の様子



「刀剣・甲冑」の取り扱い



仏教美術（絵画・彫刻）の取り扱い

研修に参加しての感想

平成25年度第1回の研修会は、文化財の取り扱いをテーマにしたものでした。まずは会場をご提供下さった岡山県立博物館にて、佐藤寛介学芸員の説明を聞きながら特別展「Japan-漆の世界」を鑑賞させていただきました。展覧会を組み立てる際の経緯などもお聞きすることができ、興味深く拝見しました。続いて、同館の田村啓介館長より「岡山県の文化財行政の現状と課題」のテーマでご講演があり、美術館・博物館の所蔵品だけでなく県内の多様な形態の文化財に目配りをした内容に、専門外のものも含む文化財全般についての関心を喚起されました。

その後は、県博佐藤学芸員より刀剣・甲冑の取り扱いについて、県立美術館の中田利枝子学芸課長より仏教美術（絵画・彫刻）の取り扱いについて教えて頂きました。

刀剣や甲冑については、展示で見ることがあっても実際にどのように扱われているのか、恥ずかしながら全く知ら

ずにいました。目の前で作業を見せていただき、実際に使われている道具や資料について教えていただく機会は大変貴重なものだと思います。日頃、仕事のうえで扱っている作品は限定されたもので、それにも次第に慣れが生じがちなのように思います。続く中田学芸課長のお話にも、何故そのように扱うのがよいのか、どういった点に注意すべきなのかという視点からの説明が多くあり、改めて作品の扱いについて考える機会になりました。

文化財は多様で、仕事の上でいつどのような対象に出会うかわかりません。習熟することは難しいですが、このような機会を通して新しく学び、見直しができるというのは本当にありがたいと思います。ご指導、お世話下さった皆様に感謝します。

（笠岡市立竹喬美術館 徳山亜希子）

アートプロジェクト「廻遊—海から山から—」を開催 —廻遊-海から山から-実行委員会—

岡山県と実行委員会の主催により昨年秋開催した「廻遊—海から山から—」は、アーティストによる短期滞在制作(アーティスト・イン・レジデンス)を中心としたアートプロジェクトです。

3人のアーティストによる短期滞在制作に、吉井川流域を中心としたエリアで開催される様々なアートイベントが参加し、県北と県南をアートの力で結びつくとともに、文化を核とした地域づくりを目指す事業として企画されました。9月から12月の会期で、瀬戸内沿岸から中国山地までの8つのエリア(宇野、牛窓、備前、和気、赤磐、美作、津山、奈義)で行われる約20のアートイベントを巡りながら地域の文化と風土の魅力に触れていただくために、様々な交流事業によってつながり協力して事業を盛り上げていきました。ちょうど県北部の美作地域では、美作国建国1300年記念事業が開催され、また、四国への玄関口の宇野は、瀬戸内国際芸術祭2013の会場となっていましたので、それぞれとの関わりを持ちながら事業を進めました。

短期滞在制作では、本県ゆかりのアーティスト3名を招聘し、エリア内の空き家や空き教室などを活用しながら、地域の素材をもとに作品を制作・公開しました。そのうち、黒田武志氏は、牛窓に滞在し、街角ミュージゼ牛窓文化館で流木やトロボ箱など、土地の記憶を持つ素材で「記憶の灯台」というタイトルのインスタレーション作品を公開制作、また、本田孝義氏は母校の赤磐市立山陽西小学校を舞台に、ミュージシャンのワークショップにより子どもたちが楽曲の創作・演奏を行う「山陽西小学校ロック教室」を映像として記録しドキュメンタリー作品として上映、さらに、住中浩史氏は宇野と美作に滞在し、「海と山、つなぐ場のプロジェクト」と題し、山では海の魚、海では山の猪肉・鹿肉を提供するイベントを開催し、地域と人とがつながる場をつくりました。いずれも、地域住民のワークショップや地域のアーティストとコラボレーションする交流事業を併せて開催しました。

また、エリア内のアートイベントを巡るスタンプラリーの実施、作家の作品をカプセルに入れ販売する「アート in ガチャ」、リヤカーを使った移動式茶席の巡回、ガイドブックやホームページの作成など、地域と人とアートをつなぐ仕掛けをいくつか用意し、様々な形でアートを楽しんでいただくことができるよう工夫しました。

今回のアートプロジェクト「廻遊—海から山から—」は、地域の文化芸術活動の活性化とそれを支えるネットワーク作りに大きく貢献できたと思います。今後もエリアを変えながら実施したいと考えています。

(岡山県文化振興課 川崎 正博)



黒田武志作品「記憶の灯台」展示風景 (街角ミュージゼ牛窓文化館)



本田孝義「山陽西小学校ロック教室」制作風景 (赤磐市立山陽西小学校)



住中浩史アートイベント「つなぐ商」実施風景 (津山市衆楽園)

岡山県博物館協議会賛助会員企業・団体一覧 (平成26年1月1日現在)

(株)イーオン
(株)岩井工業所
医療法人えんさこ医院
(株)大手饅頭伊部屋
(株)大本組
岡崎共同(株)
(株)岡山医学検査センター
岡山ガス(株)
公益財団法人岡山県郷土文化財団

岡山市農業協同組合
岡山大鵬薬品(株)
(株)岡山臨港
管公学生服(株)
(株)菅田
(株)キャリアプランニング
倉敷木材(株)
坂本工業(株)
(株)佐野組

三友不動産(株)
山陽映画(株)
(株)サンラヴィアン
シャープタカヤ電子工業(株)
(株)成通
全日信販(株)
タカヤ(株)
(株)田中商会
(株)中国銀行

中国建設工業(株)
東洋砕石工業(株)
(株)トマト銀行
友野印刷(株)
トヨタカラー岡山(株)
(株)トンボ
(株)ナイカイアーキッド
鳴本石材(株)
日本通運(株)岡山支店

蜂谷工業(株)
(株)林原
備前信用金庫
日生運輸(株)
(株)フジワラテクノアート
フルハーフ岡山(株)
(株)ベネッセホールディングス
(株)山田養蜂場本社
両備ホールディングス(株)

編集後記

会報45号をお届けします。今回は研修会レポートを2つ掲載しています。1つは前号でも少し掲載した研修会「異種館の交流事業の可能性をさぐる」の詳細について。当日ご参加いただけなかった方にもどのような内容だったのか十分にお伝えできるものになっております。そしてもう1つは11月に開催された研修会「文化財の取り扱いについて」です。実技を交えて行われたこの研修会。改めて作品の取り扱いについて考えさせられることがあったのではないのでしょうか。次回の研修会は2014年2月28日(金)を予定しています。

(岡山県博物館協議会 事務局員 大山 真季)

岡山県博物館協議会会報

岡山の博物館

No.45 平成26年1月発行

編集・発行 岡山県博物館協議会

会長 鍵岡 正謹

事務局

〒700-0814 岡山市北区天神町8-48

岡山県立美術館内

TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648